

現代社会の理不尽に振り回されず“毅然とした人物”になるために！ <その2>

道徳の根本修得・論語編

自身の善悪正邪の判断基準を確立し、次の時代の真のリーダーになる！

<孔子の弁(大学より)>

「訟を聴くは、吾なお人の如きなり。必ずや訟無からしめんか」と。情無き者は其の辭を盡くすを得ず。大いに民志を畏れしむ。

「訴えを聞いて裁くなら、私は普通の人と同じである。必ずや、理のない人に訴え事をさせないようにしたいものだ」と。言うことに実のない嘘つきの人には、その嘘の言葉を述べ尽くすことができないようにさせ、大いに民の心を恐れさせ、その意を誠実ならしめて訴え事をしないようにさせるのである。

『論語』は、約2500年前に『孔子』を中心にした人間集団の記録であり、世界でも有名な古典の一つです。我々日本人の祖先も、千数百年にわたり読みつがれており、『論語』を意識するしないに関わらず、日本人の思想形成にもっとも大きな影響を与えてきた書物です。

徳川時代には、武士階級だけでなく、少し学問した人で『論語』を読まない人はないという程で、日本人にとっては古典中の古典でもあります。

また、明治初期生まれの日本を代表する事業家たちは、『論語』を幼児期から叩き込まれ、その人たちが大きく活躍しています。

日本人が普段、何気なく使っている格言の出处は、もっとも多くは『論語』にあると言っても良い程です。知識や学問が生きるも死ぬのも、それを所有している“その人次第”なのです。

<学問の3段階レベル>

第1段階は、自分自身の労働力としての“時務学”の勉強

より多くの収入(給料)と引換えるために、人としての付随的要素(知識や技術)の“習得レベル”。

第2段階は、自分自身の生活を豊かにするための“時務学”の学問

知識や技術の習得を勉強レベルで捉えるのではなく、時務学での学問の根本原理を修得(応用)して、自分自身の日常生活を豊かにしようとする、自分自身のための“時務学の学問レベル”。 小人型

もっと上の第3段階は、社会をより豊かにするための“人間学”の学問

この段階になると、天下や国家に基づいて学ぶため、人間学の学問が進むに応じて、学ぶ者の品性も自分自身のためではなく、『治国』『平天下』からの“大人レベル”に自然と向上する。

<福沢諭吉の弁>

自分の身の行く末のみを考えて、 どうしたら立身ができるだろうか、 どうしたら金が入るだろうか、 どうしたら立派な家に住むことができるだろうか、 どうすれば旨い物を食い、良い着物を着られるだろうか、というようなことにばかり心を引かれて、あくせく学問するということでは、決して真の学問はできないだろう。

進め方の特徴

『論語』の講義ではなく、言わんとしている内容を受講者同士で“会読()”を中心にして議論・検討していきます。

“会読”に際しては、机上論を排除し、現在における社会(世の中)の“現実的な例え”を据えることで、実践的に活きた学問(実学・活学)で議論・検討します。

これにより、自分自身の善悪正邪の判断基準を奥深く考える能力を高めることができます。

数人で同じ書物を読み合い、その内容や意味を論じ合い、自身の言葉で他の人にも説明すること。

進め方の基本方針(論語より)

自分の力で進んで、いま一步というところまで来てもたもたしている。そういう相手でなければヒントをあたえても意味がない。

言いたいことは頭にあるのだが、何とせうもうまく言えないで、もどかしがっている。そういう相手でなければ助け舟は出しても意味がない。

こちらで一つ例を示してやると、直ちに他へ類推をはたらかせてピンと応ずるのでなかったら、それ以上の指導は差し控えるよりほかはない。

カリキュラム

『論語』は、断片的な短い句を集めたものであるため、その思想が体系づけられていません。

ゆえに、実践的に活きた学問(実学・活学)として修得していくために、下記に分類して進めます。

第1回	道理と為政	第1部 道徳
		第2部 為政
		第3部 為政者
第2回	君子(大人)と小人	第1部 君子
		第2部 大人と小人
第3回	徳目	第1部 徳
		第2部 仁
		第3部 礼
		第4部 孝
第4回	大局的 ^{くんじ} 主要訓辞	第1部 明徳を明らかにする
		第2部 民に親しむ
		第3部 至善に止まる

開催要項

時間 平日コース：5時間×4回

休日コース：7時間×3回

定員 少人数制 各自で『論語』を購入し、事前必読願います。